新年号特集

今すぐ行動を、私たちとともに

気候危機に立ち上がる若者たち

今年の新年号特集は、世界的にいのちや土地、生業等が脅かされ、緊急課題となっている地球温暖化、気候危機に対して声をあげているＦＦＦ（Fridays For Future＝未来のための金曜日）の皆さんに、気候危機打開の目標や対策の問題点、ＦＦＦのとりくみ、学校や都教組にできることなどについて伺い、学校や地域、そして都教組の活動に生かしていく一助にしようと考えました。（取材は昨年11月末、都教組会議室にて。聞き手は木下委員長、尾賀書記長）

声をあげる、社会を変える、学校でも都教組でも

FFFに参加するきっかけ

木下　取材を受けてくださりありがとうございます。まずは自己紹介をお願いします。

阪田　都内の大学、総合政策学部の2年生で、社会運動や社会学、非営利組織の勉強をしています。高2の秋、学校のグランドが水没し、部活動が出来ないという経験をしました。気候変動がたいへんな問題だと実感し、ＦＦＦの活動を知り、参加して3年が経ちます。これまで気候マーチやスタンディング、アピール等の活動を行ってきました。

田原　都内の大学3年生で、社会学部の哲学のゼミで学び、世代間正義や、まだ生まれていない世代のために現代の者が配慮する義務があるのか、まさに気候変動に絡むテーマで研究しています。小学校の頃から氷河の面積が減っている映像を授業で見るなどして、少しずつ自分の危機感が養われてきました。ＦＦＦに入って1年4ヶ月です。

大学２年の
阪田留菜さん

加藤　私は都内の私立中学の2年生です。ＦＦＦに入ったきっかけは、いろいろと母が教えてくれた中に、気候変動やＦＦＦのことがあり、自分でも参加できることを知り入りました。

グレタさんの座り込みから始まったムーブメント

木下　ＦＦＦの紹介をお願いします。

阪田　２０１８年にグレタ・トゥーンベリさんがスウェーデンの国会議事堂前で始めた座り込みから広がったムーブメントです。世界では５０００地域くらいでとりくまれ、北米や南米、アフリカにもあります。金曜日に学校を休んでストライキをし、気候危機を訴えることを主軸に置いて活動しています。ＦＦＦにはリーダーなどはおらず、グレタさんがトップではありません。いろいろな人が対等平等に参加しています。

田原　日本では各地域でメンバーが集まってコミュニケーションをとったり、日本全体でキャンペーンをするときに、統一のスローガンを作ったりしています。

東京では4つの目標を掲げて活動しています。その目標は、①温室効果ガス削減目標62％以上、②２０３０年脱石炭、③再生可能エネルギー１００％で安定供給できる環境づくり、④ＭＡＰＡ（地球温暖化による気候変動の影響を最も受ける人々や地域）の人々の声を聞くことです。

今は国会やG7サミット等に向けたアピール行動に向け準備しているところです。日本では高校生と大学生が多く、４００人くらいが活動しています。中学生は加藤さんの他に2人ほどいます。

金曜日にスタンディング、FFFは気軽に入れる

阪田　最近は、東京などで金曜日の学校が終わった後に、経産省前等でスタンディングをしたりするとりくみを行っています。横浜や京都でもそうした活動をしています。

ＦＦＦは入口が広く、資格もいらず、入りやすかったんです。（加藤、田原うなずく）とにかく、ＦＦＦにつながっている人に、「入ります」と伝え、ライングループなどに入れば、入ったことになります。

大干ばつや氷河融解で子どもたちが学校に行けない

木下　気候危機の現状や地球温暖化緩和の目標、対策等についてお話しください。

加藤　世界的に地球全体の気温上昇を1・5℃までに抑えようということを目標にしています。今は1・1℃くらいまで上がってしまっています。それだけでも世界中で干ばつや洪水が起きています。干ばつ被害のある地域では、子どもたちが水を遠くまで汲みに行くので、学校にも行けない事態も起きています。

木下　氷河が溶け、魚が捕れなくなり、小学5年生の子どもが親の漁業を手伝うために学校を辞めなければならない事態も起きているそうですね。

田原　海外の干ばつで、食料輸入割合が多い日本も大きな影響を受けることになります。祖父母がいる熊本では、球磨川が増水して道路が大きく崩れ、今も工事中の地域があります。老人ホームが水没して多くのいのちが失われ、とても辛い思いをしました。

社会の仕組みを変える行動を

木下　COP27では初めて気候変動による損失と被害への資金調達が議題となり、最終合意では、途上国への支援のための基金創設が決まりました。皆さんの受け止めは。

阪田　基金創設は評価できますが、お金を出して収まる問題ではありません。先進国が途上国を抑圧してしまう社会の仕組みを変える行動が必要だと思います。全体的に1・5℃目標への意識が薄れてしまっているのではないかと感じました。

権力と経済力のない大多数の人々の声を聞いて政策を

木下　またも日本が不名誉な「化石賞」を受賞しました。日本の気候危機打開の目標やとりくみ等について、お聞かせください。

田原　海外において日本が、気候変動を加速させ、さらに現地の人権を侵害するようなプロジェクトを行っていることには大きな不満があります。また国内では、政府も企業も一般の人も、1・5℃に抑えようと本気で思っている人が少ないことがすごく悲しいです。1・5℃目標や気候変動などについて学び、どうしたらいいんだろうと考え、行動することが必要です。

社会を変えることができるような地位に就いている人々、また経済的、時間的、精神的余裕のある人々は、1・5℃を超えても適応できてしまう豊かさを持ち合わせています。そういう人たちが政治や経済の中心にいるため、そうでない人の声が取り入れられない。そういう人々の声を取り上げて政策をすすめない限り、1・5℃目標を達成したり気候危機を打開したりすることは難しいと思います。

すぐやらなければならない、みんなの問題

阪田　私たちを失望させる発言をする政治家が多くいます。COP27で開かれた若い環境活動家との対談で、日本の政治家が、気候変動は「若者の長期的課題」だと発言し、「えっ」と思いました。すぐやらなければならない課題であり、若者だけの課題ではありません。

再生可能エネルギーの拡大 CO²ゼロに

木下　日本では火力発電所の新設まですすめようとしていますね。

田原　水素・アンモニアを開発して、二酸化炭素排出量を減らすことはいいのですが、グリーン水素にしても、一体それらがいつできるのか。また、コストもかかる。そんなことをしているなら、再生可能エネルギーを推進してほしいですし、今ある技術ですぐにすすめてほしいです。

加藤　水素・アンモニアの発電でCO²を抑えられるのはいいのですが、「出さない」ということが曖昧にされては困ります。

木下　政府は原発の新増設も打ち出しています。

阪田　温室効果ガスが出ないからと、原発の活用が言われていますが、福島原発事故もありましたし、何かあったときに被害を受けるのは原発を建てることを決めた人ではなく、そこに住んでいる人や漁業、農業を営んでいる人たちです。不公平が生じるものを政策として打ち出していいのか、疑問です。

社会は変えられると実感がもてる授業を

木下　学校や労働組合、教職員組合の学びやとりくみが不十分ではないかという声も聞きますが。

中学２年の
加藤結衣さん

加藤　小学校では、火力発電所を減らすことは温室効果ガスを減らすことにつながるところまでは、先生から聞きました。でも、なぜ減らさなければいけないのか、増え続けるとどうなるのかについての話はありませんでした。先生もそこまで深刻に捉えていないようでした。

田原　何の社会問題でもそうですが、温暖化等の言葉を記号化し、消費しているだけの授業のような気がします。あくまで教科書に載っている「物語」、テストのために使われている「言葉」になっています。実際に起きていることやとりくみについても、もっと多くの子どもたちに伝えてほしいです。そうすれば、温暖化や気候危機について、先生たちも真剣に考えているんだと伝わり、温暖化を実際の問題として認識できます。

また、実際に活動している人を呼んで授業をすれば、社会はそうやって動かすことができ、変えられるんだ、と学べるのではないでしょうか。「陳情」や「請願」についても、仕組みは学びましたが、実際にどのように提出するのかまでは学べていません。ＦＦＦでは「学校講演」にとりくんでいますが、なかなかとりあげてくれません。政治的、社会的なことについて、学校は子どもたちに話してほしくないように思えてなりません。

阪田　気候危機といろいろなことはつながっているので、どの科目でも授業をすすめてほしいと思います。理科の実験でCO²をつくりましたが、これも気候危機につながっています。その実験で、気候危機や気候変動とつながっているという話があったら、さらにおもしろかったと思います。光合成などの学習でも、葉っぱ1枚のしくみだけではなく、林とか森とかに視点を大きくひろげれば、気候危機とつながります。これは政治的でも何でもなくて、極めて科学的な話です。子どもたちにどんどん話してほしいと思います。

▲気候マーチでアピールする FFF ジャパンの皆さん

気候危機打開につながる多忙化解消や学校改築

田原　労働時間が長いと、気候危機などの問題を考え、子どもたちに伝える余裕がなくなるので、教職員の多忙を解消することも大事だと思います。

阪田　学校の建て替えでは、温暖化ガスの排出量をゼロにする建築もできるので、都教組から教育委員会に要望してほしいです。また、海外では、先生のＦＦＦをつくって活動しているので、日本、東京でもひろげてほしいと思います。

学校でも世界に目を向けられる機会を

木下　イタリアでは気候マーチに公欠で子どもたちが参加できることを認めたり、韓国では子どもたちが気候危機にかかわる要請書を作って政府に要望したりしていますね。

加藤　学校では世界に目を向けられる機会をつくってほしいです。ユニセフの募金は小学校でもやりましたが、なぜ募金をやらなければならないのか、それは詳しく話してくれませんでした。

公立中学校の友だちに聞いたところ、生徒会は一応あるけれど、機能していないし、「校則を変えて」など言えない空気があるそうです。

田原　私は生徒会長をやっていました。今思えば、もっといろいろやればよかったと思います。中学ではお祭りさわぎの一環としてやってしまった感じがします。もっと生徒会とは何なのか、など考えて行動すればよかった、と反省しています。

木下　学校における自治活動、主権者教育も大切ですね。

加藤　4年生のとき、学級会があって話し合いでクラスのことを決めることがありました。しかし、そうした話し合いはその先生のときにしかなかったので、学校全体でやってほしいと思います。

大学３年の
田原美優さん

みんなで変える実感をもつことが大事

尾賀　何のために話し合っているのか、それがどういうことにつながっているのか、また、実際に変えていけるとか、学校でそういう実感がもてるようにしなくてはいけませんね。

田原　学校では、あるとりくみをしている人を呼んで、国会では〇〇法案が提案されていて、それが通るとどういう影響があり、それに対して自分たちはこう考え、こういうとりくみをしている、というような話をしてほしいなと思います。私も、ＦＦＦに入って活動し、社会を動かすことを具体的に実感しました。それを学校でも教えてほしい。実際に私は、立川市の環境基本計画に対しての陳情を提出して、議会で陳述しました。陳情は継続審議となりましたが、実質不採択。でもよい経験になりました。

阪田　みんなで変える実感をもつことが大事です。学校の生徒会選挙などでは、人気投票になりがちで、今の生徒会では社会を動かすことなど、実感しにくいと思います。校舎が古いときなどに、変えてほしいと議会に陳情を出すような経験をするのもいいのではないでしょうか。

もっと政治に声をあげて、政策で判断して

木下　気候危機も政治や平和と密接につながっています。

田原　大学で政治学を学び、初めて政治についていろいろと知りました。選挙公約だけでなく、その裏に何があるのか、それを見抜く力や考えられる土台が国民の中に根付いていないように思います。高校から政治学の学習をしてほしいと思います。

阪田　政治家の人は偉いとされていますが、ぺこぺこする必要はないと思います。もっと市民が政治家に意見を言っていい。政治家には嘘はつかないでほしいとずっと思っています。嘘をつかないとか、法律を破らないとか、そういう基本的なところから、政治家の人には学んでほしいです。

加藤　学校などでは、政治についてあまり勉強していないのでよくわかりません。テレビ番組の世論調査で、ある政党に賛成する理由が「他よりよさそうだ」という理由で選んでいたのを見ました。政策ではなくて。有名な人がその政党を支持しているから投票するということも聞いたことがあります。有権者が政策に目を向けていないなと思いました。

戦争が身近になっている今、声をあげることこそ

田原　ウクライナ戦争でも北朝鮮からのミサイル発射でも、「戦争慣れ」「ミサイル慣れ」してきていることに危機を感じています。政治家に、国民は戦争をやってもいつか慣れてくるな、ミサイルも慣れてくるな、と思われているのではないでしょうか。『ＮＯ　ＷＡＲ』とプラカードを掲げて反戦運動をしても意味あるの、これで戦争止められるの」、という声もありますが、そういう人たちがいなかったら一体どうなるのか、さらにひどくなるのではないか、これはとても大きな違いだと思います。戦争反対と声をあげ平和を求める人々のとりくみを絶対に消してはいけないと思います。意思表示は重要です。

加藤　ウクライナ戦争では、人道支援をしてほしい、と聞くし、募金なども行っていますが、他にも世界では内戦がたくさんあり、そういうことには少ししか目が向いていないし運動もしていないように思います。平等にやってほしいと思います。

阪田　最近、戦争が身近になってきて、ストレートに戦争反対、戦争ゼロという人が少なくなってきています。殴るなどの暴力についても感覚が鈍くなってきているように思えて悲しくなります。当たり前のことを言えなくなっている、だから私も意思表示、声をあげることが大事だと思います。

行動に参加して、「学校講演」もひろげてほしい

尾賀　改めてFFFとして実現させたいことは何ですか。

阪田　気候マーチなど、1万人単位で実現したいので、ぜひ皆さんも参加してください。たくさんいないとアピール力が弱くなります。気候危機＝若者、というくくりをされていますが、そうではありません。誰でも参加できるし、みんなの問題です。ホームページやインスタグラムで発信しているので、ぜひ見てください。

田原　ＦＦＦとしては「学校講演」をひろげたいです。政治家も、国民が求めてないと動きません。学習が必要です。友だちには「政治に期待していない」「そんなことやって意味あるの」などと言われます。それに対する答え、政治に対する意味を見つけていきたいです。「学校講演」については、ＦＦＦのメールアドレスに連絡してください。

加藤　友だちには私の活動が特殊だと思われています。もっとみんなが気軽にかかわれるようにしていきたい、こういう活動に参加することが当たり前だという社会にしたいと思います。

一緒に気候危機を解決していきたい

尾賀　最後に、取材の感想や組合員に伝えたいことをお聞かせください。

加藤　こうした取材は初めてで、すごく緊張しましたが、いろいろな意見が聞けてよかったです。

阪田　都教組が気候危機のこと、ＦＦＦのことをとりあげてくれて、大変うれしく、また勇気づけられました。一緒に気候危機を解決していきたいと思います。気候変動とともに教育に関することが話題になり、自分がこういう風に思っていたんだと初めて気づいて楽しかったです。

田原　都教組の皆さんはいっぱい社会運動をしているし、政治などについてもいろいろ話が聞けたので、勉強になりました。

木下　今後、直接皆さんの話を聞いたり、一緒に行動したりする機会をつくりたいですね。長時間にわたる取材、ありがとうございました。

＊「学校講演」の問い合わせ、申し込みなどはメールで（新聞都教組を見たことを伝えてください）

＊ FFF ジャパンのホームページはこちら